

分類 番号	A28	取組 名称	住まいと住まい方における温暖化防止活動に関する研究
研究代表者：	生命環境科学研究科	職・氏名：	教授・松原 齋樹
研究担当者：	京都府立大学（松原齋樹、柴田祥江、宗田好史、小仲美穂、阿波一馬、近藤唯、赤田智也） 外部分担者・協力者（竹花由紀子氏、河田理恵子氏、木原浩貴氏ほか）		
主な連携機関（所在市町村、機関（部署）名）	京都府地球温暖化防止活動推進センター（京都市，NPO 法人，）		
<b>【研究活動の要約】</b>			
<p>本研究は 26 年度から継続して、「手作り」の DIY 的な省エネ対策、住まい方による省エネルギー行動などによる温暖化防止活動の普及・推進を目的としている。その中で、府民に受け入れられやすいエコな暮らしの具体例を検討して、その効果を予測しつつ普及を進めることを意図している。1.ホームセンターで購入できる資材を利用した住まいの省エネ対策の実施と効果測定として日よけシェード等の設置を行い温湿度およびエネルギー消費量調査、アンケート・ヒアリング調査を行った。2.小学生を対象とした環境教育の効果測定を行い、参加者数の変化、選択式回答、自由記述の分析を行った。3.町家型居住者を対象とした暮らし方のヒアリング調査とエネルギー消費量調査を夏期・冬期に行った。</p>			
<b>【研究活動の成果】</b>			
<p>ホームセンターで購入できる資材を利用した住まいの省エネ対策のうち、日よけシェードを設置した 20 軒の住宅では、温冷感・快適感とも全般的に向上する傾向が見られた。自由記述から、「生活の中の省エネについて意識するようになった」という回答が 4 名に見られ、この活動を行うことによって、簡易な省エネルギー対策を広めることに貢献したと言える。</p> <p>小学生を対象とした環境教育の効果のアンケート調査には、京都府内 140 校以上、18000 世帯以上が参加した。意識の高さと省エネルギー行動の実践得点、および参加回数と意識にも関連が見られ、継続して参加することで意識が高まることが明らかになった。</p> <p>町家型住宅の調査では、現代型住宅と比較すると、窓の開放志向が強く冷房の使用がかなり少なめである傾向が見られた。また床面積当たりの夏期電力増加量（冷房使用量に相関する）は、町家型の方が少ない傾向が見られた。夏期のみ寝室を 1 階に変更する、視覚的・聴覚的・嗅覚的な環境要因を肯定的に受け止めていることによって、温熱的な不快さが軽減されていることなど町家型の居住者の特徴がエネルギー消費に関係していることが示唆された。</p>			
<b>【研究成果の還元】</b>			
<p>研究成果報告会 平成28年2月19日午後、府立大学稲盛記念会館106教室にて開催した。参加者は、温暖化防止活動の関係者等約25名であった。アンケート結果は、「大変よかった」が6/19、「まあよかった」が12/19であり、各講演もわかりやすいという回答が多かった。</p> <p>この成果は、平成 28 年度日本建築学会大会（福岡）にて発表予定である。今後は、ホームページからの情報発信を強化する予定である。</p>			
<b>【お問い合わせ先】</b> 生命環境学部環境心理行動学（建築環境工学）研究室 教授：松原齋樹			
Tel: 075-703-5426		E-mail: n_mats@kpu.ac.jp	

参考 (イメージ図、活動写真等)

手作り内窓を設置講習会 京丹後市 (H26/10/11)



研究成果報告会 H28/2/19 府立大学稲盛記念会館 106

